

三井住友海上プライマリー生命 *Presents*

# チェコ・フィル

首席指揮者・音楽監督 **セミヨン・ビシュコフ**

チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

ヴァイオリン **樫本大進**

ビシュコフとともに新たな時代を築くチェコ至宝の響き！



©Marco Borggreve

主催：日本経済新聞社／ジャパン・アーツ

特別協賛：三井住友海上プライマリー生命保険株式会社（10/22・10/28 公演）

後援：チェコ共和国大使館

## 公演詳細

### 新時代の幕開けを飾るチャイコフスキー 榎本大進との絆によって昇華する輝く音世界

【東京開催】10月22日(火・祝) 18:00 開演 サントリーホール

【出演者】 セミヨン・ビシュコフ(音楽監督・首席指揮者)、榎本大進(ヴァイオリン)  
チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

【プログラム】 スメタナ：モルダウ～連作交響詩「わが祖国」より

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op. 35 (ヴァイオリン：榎本大進)

チャイコフスキー：交響曲第6番 ロ短調「悲愴」Op. 74

《チケット料金》 S席：22,000円(21,000円) / A席：18,000円(17,000円) / B席：15,000円(14,000円)  
C席：12,000円(11,000円) / D席：9,000円(8,100円)

### 深い詩情で奏でる祖国への熱い思い！

【東京開催】10月28日(月) 19:00 開演 サントリーホール

【出演者】 セミヨン・ビシュコフ(音楽監督・首席指揮者)、榎本大進(ヴァイオリン)  
チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

【プログラム】 スメタナ：連作交響詩「わが祖国」

《チケット料金》 S席：20,000円(19,000円) / A席：16,000円(15,000円) / B席：13,000円(12,000円)  
C席：10,000円(9,000円) / D席：7,000円(6,300円)

●お問合せ：ジャパン・アーツぴあ 0570-00-1212

### その他公演

10月19日(土) 愛知県芸術劇場コンサートホール (問) 中京テレビ事業 052-588-4477

【プログラム】 スメタナ：交響詩「わが祖国」より “モルダウ” ほか  
チャイコフスキー：交響曲 第5番 ホ短調 op. 64

10月20日(日) 横浜みなとみらいホール (問) 横浜みなとみらいホールチケットセンター 045-682-2000

【プログラム】 スメタナ：連作交響詩「わが祖国」より “ヴィシェフラト(高い城)” “モルダウ” “シャルカ”  
チャイコフスキー：交響曲第5番 ホ短調 作品64

10月24日(木) 文京シビックホール ★ (問) シビックチケット 03-5803-1111

【プログラム】 チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲  
ドヴォルザーク：交響曲第9番「新世界より」

10月25日(金) NHKホール ★ (問) NHKプロモーション音楽祭係 03-3468-7736

【プログラム】 チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲  
ドヴォルザーク：交響曲第9番「新世界より」

10月27日(日) ザ・シンフォニーホール ★ (問) ザ・シンフォニー チケットセンター 06-6453-2333

【プログラム】 スメタナ：連作交響詩「我が祖国」より「モルダウ」  
チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op. 35  
チャイコフスキー：交響曲 第6番 ロ短調 「悲愴」 op. 74

10月29日(火) 熊本県立劇場 (問) 同左 096-363-2233

【プログラム】 スメタナ：連作交響詩「わが祖国」  
第1曲：ヴィシェフラト(高い城)  
第2曲：ヴァルタヴァ(モルダウ)  
第3曲：シャルカ  
第4曲：ボヘミアの森と草原より  
第5曲：ターボル  
第6曲：ブラニーク

★：榎本大進出演

## セミヨン・ビシュコフ Semyon Bychkov (音楽監督・首席指揮者, Music Director/Chief Conductor)

1952年レニングラード(現・サンクトペテルブルグ)生まれ。1975年アメリカに移住し、1980年代半ばよりヨーロッパをベースに活躍している。

2013年のチェコ・フィルとの公演に続いて、彼は同楽団と「チャイコフスキー・プロジェクト」を開始。コンサート・シリーズやスタジオ録音などを通して、チャイコフスキーの音楽を追求する喜びを共有している。同プロジェクトでは、2016年秋にデッカ・レーベルから交響曲第6番「悲愴」(カップリングは幻想序曲「ロメオとジュリエット」、1年後には「マンフレッド交響曲」)をリリース。そして2019年秋には、チャイコフスキーの交響曲全曲、3つのピアノ協奏曲、弦楽セレナード、「フランチェスカ・ダ・リミニ」などが収録されたボックスセットの発売と、それに続く同楽団のプラハ、東京、パリ、ウィーンでの公演で最高潮を迎える。

ソヴィエト連邦を離れてから14年後の1989年、彼は母国に戻り、サンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団の首席客演指揮者に就任。そして同年、パリ管弦楽団の音楽監督に就任した。また、その数年前からニューヨーク・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管などの楽団で活躍し、国際的なキャリアが活発になった。1997年にはケルン放送交響楽団の首席指揮者、1998年にはドレスデン国立歌劇場の首席指揮者に就任。2018年10月、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者・音楽監督としての任期をスタートさせた。

ビシュコフは、欧米の主要オーケストラや歌劇場で指揮をしている。チェコ・フィルのタイトルその他、BBC交響楽団の名誉称号も与えられ、BBCプロムスには毎年登場している。また王立音楽院では、チェコ・フィルと共に、2020年より教育プログラムのシリーズを立ち上げる予定。また2015年のインターナショナル・オペラ・アワードでは、「コンダクター・オブ・ザ・イヤー」に選出された。

コンサートのステージにおいては、生来の音楽性と厳格なロシアの教育に拠る演奏が高く評価されている。4世紀という広範囲におよぶレパートリーを持ち、今シーズンには、チェコ・フィルとの大規模な日本ツアー(今回)やロシア、中国、スペインでの公演の他、ミュンヘン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管の本拠地とドイツでの公演や、ウィーンでのR.シュトラウス「エレクトラ」、ロンドンでのワーグナー「トリスタンとイゾルデ」などの公演が予定されている。

録音でのキャリアは1986年にフィリップスとの契約で始まり、ベルリン・フィル、バイエルン放送響、ロイヤル・コンサートヘボウ管、フィルハーモニア管、ロンドン・フィル、そしてパリ管などと膨大かつ記念碑的なディスコグラフィを作り上げてきた。ケルン放送響との13年のコラボレーション(1997-2010)では、ブラームスの交響曲全集やR.シュトラウス、マーラー、ショスタコーヴィチ、ラフマニノフ、ヴェルディなどの作品を収録。ワーグナー「ローエングリン」の録音は、BBCミュージック・マガジンのレコード・オブ・ザ・イヤー2010に選出され、ウィーン・フィルとのシュミットの交響曲第2番の録音は、同誌の「レコード・オブ・ザ・マンズ」に選出された。

## 榎本大進 Daishin Kashimoto (ヴァイオリン, Violin)

1979年ロンドン生まれ。1990年、第4回バッハ・ジュニア音楽コンクールでの第1位を皮切りに、1996年のフリッツ・クライスラー、ロン＝ティボーの両国際音楽コンクールでの1位など、5つの権威ある国際コンクールにて優勝。ドイツを拠点にソリストとして世界の舞台で演奏する傍ら、2010年よりベルリン・フィルの第1コンサートマスターを務める。使用楽器は1674年製アンドレア・グッルネリ。

3歳よりヴァイオリンを恵藤久美子に学び、7歳でジュリアード音楽院プレカレッジに入学、田中直子に師事。11歳の時、名教授ザハール・ブロンに招かれリュベックに留学し、20歳よりフライブルク音楽院でライナー・クスマウルに師事。修士課程をグスタフ・シュック賞を受賞し卒業した。

これまで、マゼール、小澤征爾、ヤンソンスなど著名指揮者のもと、国内外のオーケストラと共演を重ねているほか、室内楽の分野でも、クレーメル、バシメット、マイスキー、堤剛、パユなど世界有数のソリストと共演。2007年、兵庫県で室内楽の音楽祭「ル・ポン国際音楽祭～赤穂・姫路～」を自ら音楽監督として創設し、2016年秋には第10回目を迎える。

2010年、ベルリン・フィル第1コンサートマスターに就任。同団とは、本拠地ベルリンおよびツアーでの演奏会で、音楽監督ラトルやネルソンス指揮のもとソリストとしても共演している。

2014年、ピアノのリフシツとのベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ全曲収録CDがワーナー・クラシックスより世界リリースされ、高い評価を得ている。

1995年アリオン音楽賞、1997年出光音楽賞、モービル音楽賞、1998年新日鉄音楽賞フレッシュアーチスト賞、平成9年度芸術選奨文部大臣新人賞、2011年兵庫県文化賞、チェンジメーカー2011クリエイター部門、ドイツに於いてはシュタインゲンベルガー賞、ダヴィドフ賞を受賞。

## チェコ・フィルハーモニー管弦楽団 Czech Philharmonic Orchestra

チェコ・フィルハーモニー管弦楽団は、1世紀以上に亘って、チェコ文化を代表する存在であり続けており、その温かく美しい響きで世界中の聴衆を楽しませている。ドヴォルザークは、1896年1月4日にプラハのルドルフィヌムで、同楽団の最初の公演を指揮した。ルドルフィヌムは、現在もこのオーケストラのプラハにおける演奏会の本拠地であり、新たに創立されたプラハ・オーケストラ・アカデミーの活動の中心地でもある。

マーラーは1908年プラハで、自作の交響曲第7番を、同楽団を指揮して世界初演した。チェコ・フィルはヴァーツラフ・ターリッヒ（1919～31年および1933～41年に首席指揮者）のもとで世界的な評価を上げ、1929年には、初のレコーディング（スメタナの「わが祖国」）を行った。

その後も、ラファエル・クーベリック（1942～48年）、カレル・アンチェル（1950～68年）ら、才能溢れるチェコの指揮者が首席指揮者の座についた。アンチェルの時代には国外への公演を頻繁に行い始め、これまでに、ニューヨークのカーネギー・ホール、アムステルダム・コンセルトヘボウ、ウィーン楽友協会、ベルリンのフィルハーモニー、ロンドンのロイヤル・フェスティヴァル・ホールといった世界的な会場で演奏している。またBBCプロムス、ベルリン、ルツェルン、ザルツブルクなどの著名音楽祭にも参加している。

1968～90年に首席指揮者を務めたのは、かの偉大なるヴァーツラフ・ノイマンだった。ノイマンは、当時気鋭のイルジー・ビエロフラーヴェクと密接な関係を保ち、彼もまたダイナミックな関係を築き上げていった。

ビエロフラーヴェクは、1990年首席指揮者に就任。すばらしい業績を挙げた彼に続いて、ゲルト・アルブレヒト、ウラディーミル・アシュケナージ、ズデニェク・マーカル、エリアフ・インバルが首席指揮者を務めた。2013年には、この変遷が一巡し、待望のパートナーシップが復活した。すなわち、ビエロフラーヴェクが首席指揮者として再び温かく迎え入れられたのである。

両者の再活動について、ビエロフラーヴェクはこう語っている。

「チェコ・フィルはトップクラスの名門であり、世界でも一流のオーケストラとして認められている。私はチェコ最高のこのオーケストラが己にふさわしいレベルに到達できるよう、厳しい練習の伝統と芸術面の高い目標を取り戻し、なによりも再び彼らに音楽の楽しさをもたらしたいと思っている」。

チェコ・フィルには、数多くの受賞やノミネートがある。10回のACCディスク大賞、5回のADFディスク大賞、複数のカンヌ・クラシカル賞、グラモフォンの「世界のベスト・オーケストラ・トップ20」へのランクイン（2008年）、およびグラミー賞やグラモフォン賞などである。

チェコ・フィルは、いま、並はずれた名演で世界的な注目を集め、かつての黄金時代と同様の高い水準を回復。ビエロフラーヴェクと共に、最盛期に入ったオーケストラとして伝統と革新を融合させ、新しい時代を迎えている。



お問合せ：㈱ジャパン・アーツ 広報宣伝部 TEL (03) 3499-8100

[pr@japanarts.co.jp](mailto:pr@japanarts.co.jp)



@CzechPhil

#SemyonBychkov